

令和4年9月下旬号(毎月2回上旬・下旬)

昭和47年10月7日創刊 第1272号

**MOVIE BUSINESS**

# 映画ビジネス

発行所 映画ビジネス社 発行編集人 鈴木 元 購読料月額 7,000 円  
〒105-0004 東京都港区新橋 2-13-4 TEL 03 (3502)3443 FAX 03(3502)3444

日本唯一のユニバーサルシアター  
初の映画プロデュースに挑戦

こころの**通**訊者たち

What a Wonderful World



音が見えるように  
光が聴こえるように

シネマ・チュプキ・タバタ代表

**平塚千穂子氏**

# 見えない人に「手話」を伝えるには……

## 世界を超える前人未到のチャレンジ

東京・JR田端駅から徒歩3分ほどの商店街

にある映画館「CINEMA Chupki TABATA」（シネマ・チュプキ・タバタ）。

全作に音声ガイド、日本語字幕が付き車いすスペースも設置した日本初のユニバーサルシアターだ。代表の平塚千穂子氏は、2001年にバリアフリー映画観賞推進団体「City Lights」（シティライツ）を設立し、視覚障がい者の映画観賞の環境づくりに従事してきた。10月1日に同館で先行（22日から全国順次）公開されるドキュメンタリー映画「こころの通訳者たち」ではプロデューサーを務め出演もした平塚氏に話を聞いた。

★

### チャプリン『街の灯』がきっかけ

本誌 もともと映画業界で仕事をしていただけではないのですか。

平塚千穂子氏（以下平塚） 早稲田松竹で201年にボランティアをしていたくらいです。20年にドルバイトをしていたくらいです。201年にボランティア団体を立ち上げて、視覚に障がいがある人の映画観賞環境をどのようにしていけばいいかという活動に従事してきました。

本誌 そのきっかけがチャプリンの『街の灯』ということですが、どのような出会いだったの

ですか。

平塚 早稲田松竹で働き始めて間もなく、映画関連の人たちとつながりたいなと思ってネットを検索していたら、自主映画の監督が主催している変わった異業種交流会を見つけたんです。クレイジーな夢を見ようという呼びかけに集まってきた人たちで、その監督自身も世界的な巨匠と呼ばれる監督になるという夢を持っていて、私は映画館を造りたいという夢を持って参加しました。最初は集まっては誰かがプレゼンして飲んで終わりみたいなことを繰り返していたのですが、本当にそれぞれの夢に近づけているのかと思うところで、自分たちで何か小さな目標



平塚千穂子氏

を決めて夢を達成するイメージトレーニングをするために、グループで何かイベントを企画しようという話になりました。最初はその自主映画監督の作品をとということでしたがなかなか企画が進まなかったため、それなら皆の好きなチャプリンの映画を上映しようと。でも、私たち

はクレイジーな夢を持った人間たちだから、クレイジーな企画でなければいけないというところから、見えない人にサイレント映画を見てもらうという企画が持ち上がったんです。そこでまず、当事者の人に話を聞きに行きました。映画についてどう思っていますか、チャプリンに興味はありますかというリサーチをかけたなら、思いのほか目の見えない人たちが映画を見たいと思っている、言葉でサポートしてもらえれば楽しめるのではないかと思うと、映画に興味を持っていたということを知ったんです。私は真逆で怒られるのではないかと思っていたので、見たいけれどあきらめるしかないと言っているその状況を何とかできないかと思いました。チャプリンの『街の灯』をやるという目標があったので、活弁を付けての上映などを考えて進めていたのですが、準備に時間がかかりメンバーが続けられなくなったり事情が変わったりしてイベント自体はできなくなっていました。それまで視覚障がい者の人たちに、『街の灯』を言葉で説明するデモテープを聞いてもらったりして関係性を築いていたのですが、上映会がで

### 『こころの通訳者たち』

10月1日からシネマ・チュプキ・タバタで先行、10月22日から全国順次公開

平塚千穂子 難波創太 石井健介 近藤尚子 彩木香里 白井崇陽 瀬戸口裕子

廣川麻子 河合依子 高田美香 水野里香 加藤真紀子 語り：中里雅子

監督：山田礼於 プロデューサー：平塚千穂子 撮影：金沢裕司 長田勇 編集：植垣康子

音響効果：金田智子 制作担当：越美絵

テーマ音楽：「What a Wonderful World」(歌：佐藤奈々子 演奏：長田進 録音：福岡功訓 (Fly sound))

協力：穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

(TA-net) 田端駅下仲通り商店街のみなさん 天道流合気道天道館 ものがたりグループ☆ポランの会

製作・配給：Chupki 2021年/日本/ドキュメンタリー/90分



シネマ・チュプキ・タバタ

きなくなつたと報告したら、最初からそういう無声映画の難しいところからやらないで、今映画館でやっているセリフも音もリアルな映画で合間合間にテレビドラマの副音声のようなものを入れてほしい、活動を続けてほしいと言われ

たんです。上映会のメンバーは散り散りになつてしまったので、それを専門にやるボランティア団体を新たに立ち上げて活動しようと思ったんです。

### 「続けてほしい」声受け一念発起

本誌 設立に向けては、どのような動きをされたのですか。

平塚 まず、国内でそういう活動をしている人がいないか探しました。全く実績がなかったわけではないんですけど、市民活動レベルでしか見つからなくて、市民映画祭や上映会で地元の朗読グループの人たちが副音声付き上映地域の視覚障がい者たちのためにやっていたり、大阪のシネ・ヌーヴォオさんでは目の見えないお客さまが外国映画の字幕を読んでくれれば楽しめるというところからスタートした字幕朗読上映会というのをやりました。ただ、商業的に副音声付き、バリアフリー上映というのはなかったんです。海外はどうだろうと興味本位で調べてみたら、『スター・ウォーズ』や『ハリー・ポッター』シリーズでも公開初日から副音声付

きのヘッドフォンの貸し出しがあつてバリアフリーな映画館が全米に100館以上ありますという記事を見て、映画館のホームページなどを見てもブランドピープルですと言つてレビューを書いていらつしやる方もいました。すごく浸透していることを知つて、私が仲良くなつた人たちはごく一部かなと思つていたんですけど、海外の事例なども見てこれは全世界的に映画観賞を望んでいるというニーズがあるから普及している、日本が遅れているだけだということとでやろうとなつた感じですよ。

本誌 音声ガイドに関する知識はあつたのですか。

平塚 完全な手探りです。入り口がチャブリンだったので、映像を言葉にしてそれを伝えるのは本当に難しいと思ひました。最初はNHKの連続テレビ小説などが副音声を付けていたので、それを制作している会社にお話を聞きに行つたり、日本テレビの火曜サスペンス劇場の副音声もけっこう早くから付いていたので、収録スタジオにお邪魔したりしました。加えて川崎のしんゆり映画祭に97年からバリアフリーシ



©chupki

アターという企画があつて、北野武監督の『HANA-BI』や『ライフ・イズ・ビューティフル』などに副音声が付いていたので、どうやって作っているのか話を聞きに行きました。けれど皆さん手探りで、NHKは場所の説明やシ

ーン変わりなどに付くくらいの割と淡泊な説明で、火サスはナレーターが石丸博也さんというのもあるかもしれないですけど、すごくエモーショナルな音声ガイドとまちまちだったんです。演劇の音声ガイドも参考にしたんですけれど、語尾が「ですます調」に統一されていたりと全部違うんです。視覚障がい者の人に全種類聞いてもらい、どれをお手本にしたらいいかと聞いたら、どれもしないでほしいと言われて(苦笑)。映画が変われば解説の仕方も変わるだろうし、本当に欲しい情報をそれぞれのシーンで聞いてくださいということでした。そこで、『ライフ・イズ・ビューティフル』はしんゆり映画祭の時の台本があつたので、同じ作品を自分たちで作るとどうなるかということでやってみようとなり、比べたりしながら作っては聞いてもらうという、本当に地道な研究活動からのスタートでした。

### 初音声ガイドのお披露目は酷評

本誌 その上映会が行われたのですか。

平塚 『ライフ・イズ・ビューティフル』が

できたのでお披露目しようということで、01年9月に新宿の河田町にある視覚障害者生活支援センターでクロースの形で上映会をやりました。DVDを室内で見えるような形でしたが、そこで皆さんに「なんて不親切な音声ガイドだ」と酷評を浴びたんですよ。なぜかという、私たちがモニターチェックをしてジャッジしてもらっていた視覚障がい者の人たちは、小さい頃に失明したり先天盲だったり見えないことに慣れてる人だったんです。耳の感覚が鋭いので、「立ち上がる」と音声ガイドで書いていても絹が擦られて立ち上がる感じは分かるからいらぬと言われたりして、けっこうカットしたんです。そういうサンプルになったガイドで上映したのですが、センターの方々は失明して間もなく生体訓練を受けている人たちだったんです。見えていた記憶が鮮明にあるし、不安だから見えていた時と同じくらい想像させるような情報が欲しいという人たち。だから、表情や服装なども説明がないじゃないかと言われ、あまりにも説明が少ないからガイドヘルパーさんに思わず聞いちゃったとも言われました。ただ、そこに



©chupki

現在、日本映像翻訳アカデミーで音声ガイドの講師をされている河野雅昭さんが、シテイライツの活動に興味があるということで見学に来ていらっしやいました。私たちが酷評を浴びてしどころどころになっているのを見て、どうやって

音声ガイドを作ったのか聞かれたので、先程のやり方を説明してとにかく試行錯誤でしたとお答えしました。河野さんは、なぜこういうカメラアングルになったのかなど製作者の意図を分析することも必要だと。もちろん先天盲の方と中途失明の方のニーズは違っていて、その間を取るのには難しいという問題はあるけれど、映画の音声ガイドとしてこのシーンではこの情報をチョイスすべきということ、ちゃんと理由を持つてできればそこまで迷走しないだろう。自分がアドバイスできることもあるかもしれないから、一緒に研究していきましょうとおっしゃってくださったんです。

### 通常興行でのライブ解説も実施

本誌 そこから研究が一気に進んだのでしようか。

平塚 音声ガイドは作り込まれた映像を繰り返し見て台本を起すという流れですけど、その一方で『千と千尋の神隠し』が大ヒットしたことで、今やっている映画を映画館に見に行きたいというニーズがあり、それに応えるため

一緒に映画館に言って上映中に耳元で解説をするという観賞会もスタートさせているんです。

新作映画の本編素材を一市民サークルに貸し出してはくれないので、私たちがその映画を何度か見に行つて頭の中にある程度インプットして、その後一緒に見て視覚障がい者の方にライブで解説を付けるというスタイルです。それでは周りのお客さまの迷惑になるので、劇場の方から断られることもありました。そこで、客席以外のところではしゃべっている解説者の声を客席にいる複数の視覚障がい者にイヤホンで聞かせることはできないか、歌舞伎のイヤホンガイドのような仕組みを採用してみようと思いました。FMラジオを使って、映写室に解説者を入れてもらいそこにミニFM局を一時的に開設する形で電波を客席に飛ばしてイヤホンで聞いてもらうという。それを導入してからは観賞もしやすくなったので、今も続けています。劇場で臨場感に包まれて、皆とポップコーンを食べながら映画を見るという体験は、当時の視覚障がい者の人たちにとってはどの作品を見たかというのとよりも映画館で映画を見られたということが

喜びだったんですね。皆が楽しいよと広めてくれたおかげで、03年の『ローマの休日』デジタルリマスター版では新宿のテアトルタイムズスクエアに行きましたが、参加する人が200人くらいになりました。それはそれで新宿駅からの移動も大変なんですよ。5班くらいに分けましたが、送り届けるのに旅行の添乗員をやっているのかなと思うくらいで(苦笑)。それが観賞会の全盛期でした。でも、200〜300人になってしまうと、見た後の感想会も楽しみになってくるんですけど、その場所を予約するのにも苦勞で貸し切りにできるお店を探さなければいけない。さらに、視覚障がい者の方では声で記憶していくので、誰が来ているのかという認識もしにくいので、大勢というメリットはあまりない。ですので、それまでは月に1回くらいの開催でしたが、頻繁にやって1回の参加者は30人くらいに収まるようになりました。

## 映画祭の募金で元手を調達

本誌 その過程で、かねての夢で映画館を造ろうという思いに至ったのはいつ頃ですか。

平塚 既存の映画館に遊牧民族のように移動しながら観賞会をやっていると、シネコンさんは1週間サイクルで上映時間が決まっています。予定が立てにくかったり、朝のすごく早い回でやってくれませんかと言われることもあります。視覚障がい者の方たちは、介助者の方をこの日何時から何時までお出かけしますと予約しなければいけないので、早めに予定を立てられた方がいいというのもあったし、自分たちも作品を早く決めて素材を借りられれば準備ができるということがあったので、映画館にしてみました。08年頃から本気で考えるようになって、いつか自前のリアフリーの映画館を造りたいんだという発信をするようになりました。私たちが目指している上映空間はこういう場所になります。ということです、多くの人に体験してもらいために年に1回シネライツ映画祭というものを開

《解説》シネマ・チュブキ・タバタにある相談が持ち込まれたことから21年9月、本作の撮影はスタートした。耳の聞こえない人にも演劇を楽しんでもらうために挑んだ、3人の舞台手話通訳者たちの記録。その映像を目の見えない人にも伝えられないか？見えない人に「手話」を伝えるには、コロナ禍の中で進行した個性豊かな顔ぶれによる「音声ガイド」づくり。ちょっと無茶かも…と思われたアイデアから見えない人と聞こえない人にも対話が生まれ、互いに知らなかったことに気づいていく。演劇との懸け橋になろうとした舞台手話通訳者たちの思いを伝えるようにと、壁にぶつかりながらも音声ガイドづくりを諦めないメンバーたちの思いが重なり、いつしか言語を超え、障害のあるなしを超えて、「こころ」のバトンをつないでいく。

催しました。映画祭とはいえ2、3本しか上映していませんが、それでも上映作品すべてに音声ガイドを付けてゲストも呼んだイベントなのでお祭りだと言いつ張って、そこで著名な映画人の方にも応援してもらったら、一般の人たちにもこの取り組みを知ってもらえるのではないかと、山田洋次監督や枝裕和監督をお招きしたこともありました。08年から14年まで開催し

ながら、私たちが造りたい映画館への夢貯金という募金もして、500万円集まったのでそれを元手にやつちやおうと。天井高がそれなりにあって機材を入れて上映できる空間があり、映画を毎日上映すれば私たちの映画館と言っているのだろうと思つてやり始めたんですけれど、映画館として営業するなら営業申請をしなくてはならないし、建築法、消防法などいろいろクリアしなければいけない条件があるということが後で分かったんです。最初にやり始めた場所は月に4日までだったら映画を上映していいと言われたので上映スペースという形でスタートして、そこを立ち退くことになったタイミングで今度はちゃんと映画館として営業許可を取れる所にしようと思いました。

## 誰でも安心して楽しめるように

**本誌** どのような映画館を思い描いていたのですか。

**平塚** 最初は視覚障がい者の音声ガイドだけだったんですけれど、聴覚障がい者の方には日本映画に字幕を付けてほしいという要望がある



©chupki

ことも分かりました。上映スペースをやつていた時期に、地域の子育て支援のNPOさんともつながって、同じ建物内でママと楽しむコンサートや赤ちゃん連れのお母さんたちがおやつ作りを勉強したりするサロンのようなことをやつ

ていて、小さい子がいると映画館に行かなくなるという話も聞きました。たまに親子シアターなどお子様連れに開放される上映機会もありますが、どうしても子供向けの映画になつてしまふ。大人の映画を子連れで見られないという意見を聞いて、映画館にどういう設備があればいいのかと話し合っていた時に、公共ホールに親子ブースという観賞室があり、ガラス張りの個室で防音もされているのでそれはいいと思いましたが。映画館を造るのは一生に一度のことだろうしお金もかかるから、どんな人も安心して楽しめる、視覚障がい者だけではなくユニバーサルな映画館がいいと本格的に考え、いろいろな構想を広げていきました。

**本誌** 田端を選ばれたのはなぜでしょうか。

**平塚** 私の自宅も美家も北区にあって、シテライツの団体登録も北区でしていたんですね。先程の子育て支援のNPOさんも北区の団体ですし、北区の地域振興課、文化振興課の方にはご支援いただいているグループさんは、特に子育て支援をしているグループさんは、場所が変わってもサロンは続けたいと言っていた



ので、その人たちが一緒にやりにくくならないエリアでは思っていたんです。北区にこだわったわけでもないんですけど、山手線沿線でお客さまをお迎えに行くことはしたかったので駅から5〜6分も条件としたのですが、映画館の営業申請ができるような物件は本当になかったです。ここはたまたま新築で、けっこう高い防火基準で建ててくれていたおかげで消防法もクリアできました。駅から5分で防火基準も高くて、スペースとしては小さいけれど映画館ができる。しかも、2階は簡易防音室になっていて、音声ガイドの制作ができて、スクリーンを入れればちよつと集まって映画を見られるような場所、広めのスタジオのような事務所としても使える。借りようと思っていたのですが、奇跡的にいい物件に出合っちゃったという感じで、田端は後からついてきた感じですよ。

## 平等に降り注ぐ「自然の光」

本誌 チュプキという館名にはどのような意味があるのですか。

平塚 アイヌ語で月や太陽などの自然の光を

意味します。『街の灯』から取ったシテイライツは人工の光だけれど、映画は暗闇で光を見るものだから「月」を表す言葉を探していました。月も太陽も誰にも平等に降り注ぎ、どこにいても見られるものという思いを込めました。



©chupki

本誌 『こころの通訳者たち』ではプロデューサーで出演もしていますが、端緒は何だったのですか。

平塚 山田礼於監督の企画持ち込みです。山田監督のドキュメンタリー『一片隅』たちと生きる 監督・片渕須直の仕事（19）の音声ガイドと字幕製作に監督が立ち会ってくださったんです。ドキュメンタリーなので第三者が見ていると分からない個所などもあったので、「ここはどこですか？」「これは誰ですか？」などいろいろと質問しながら作っていったんですね。それを見ていた監督が「こんな丁寧な仕事をやっているのか」と驚かれて、その時にこれは記録した方がいいよとは言われていました。その記憶が監督の中にあつて、一緒に仕事をしたことのある映像制作ディレクターの越美絵さんが「ようこそ 舞台手話通訳の世界へ」という短編ドキュメンタリーを撮ったのですが、監督が手話通訳者の3人がとても魅力的なので、これをチュプキさんの方で音声ガイドを作る人たちのプロセスも交えて長尺のドキュメンタリーを作った面白いのではないかと提案されました。



©chupki

本誌 それを受けた率直な感想はいかがでしたか。

平塚 最初はそこまで大変なイメージができていなかったんですけど、映像を見ていて手話通訳をする人たちの一生懸命さがすごく魅力

的だったので、伝えたいと思いました。また、この音声ガイドはチャレンジになる、難しいとは思っていましたが、山田監督がニコニコしながら「やってくれるよね」という感じでおっしゃってきて、お人柄も知っていたので、監督が撮ってくくださるのだからこんな絶好の機会はないと信じて乗っかりました。

### 視覚障がい者に手話を聞かせる

本誌 視覚障がい者の方に、手話を音声で理解してもらおうという作業ですから相当大変だったと推察できます。

平塚 本編にも登場しますが、手話通訳者の方から手話を音声化することに対してあそこまで反対されるとは思っていなかったんです。そこでセンシティブなものなんだということを知らずに、けっこう無邪気にとにかく音に変えないことには見えない人たちに伝わらないからということだけで提案したものが、「乱暴です」と言われるとは思っていなくて、そこは想定外でした。それまで数々の音声ガイドはやってきていて、別の作品で劇中の人が手話で会話する

ところに吹き替えを付けて見てもらうということもあったので、自分の中では何とかかなと思っていたのかもしれませんが。

本誌 でき上がった音声ガイドは、健常者にとっては情報過多くらいの印象を受けるかもしれませんが、視覚障がい者の方の反応はどうだったのですか。

平塚 最初、何をしたいのかをつかむまで混乱していたと思うんですね。お客さまもそうだと思いますんですけど、要は「凜然グッドバイ」という演劇公演を見えない人に分かってもらったのだら、手話通訳を音声化する必要はないわけです。手話通訳は耳の聞こえない人の観賞ツールであって視覚障がい者には関係ないと思いますよね。普通に舞台の役者さんのセリフを聞いていれば十分伝わるとい話になります。しかし、舞台を見えない人に楽しませたいわけではなく、舞台を聞こえない人に伝えるために一生懸命取り組んでいる手話通訳者のドキュメンタリーを伝えたいということがなかなか伝わらなかったですね。後々出演してくれた視覚障がい者たちのインタビューを聞くと、手話をや

っている人の存在は自分には関係のない人たちで、その人たちがどういうふうに伝えているかなど考えたことがなかったらしいんです。けれど、ああやって音にしてみると手話というものがちよつと見えるじゃないですか。単語プラス表情など、ほかの表現で包括的に伝えているものだということが垣間見えるから興味も湧いて、

今まで自分が全然意識の外に置いていたことにビックリしたというようなことをおっしゃっていました。だから手話通訳者の人たちがいかにあのテンポの速いセリフ回しの舞台に翻訳を追いつかせていくかということも大変だし、そこにニュアンスなども込めてやることの大変さが分かったと思うんです。伝える手法が違うだけでやろうとしていることは同じだと分かった時に、すごく興味を持ち始めたと感じました。逆に聴覚障がい者の人たちも、音声ガイドが字幕で出るといことが今までなかったもので、それが面白かったと言ってくださいました。聴覚障がい者の方は目で見えるものをすごく頼りにしているし、視覚障がい者の方も耳を頼りにしている。それぞれにいろいろな情報を得られるわ

けですが、たどり着いたところは一緒に見えない、聞こえないは関係なく、心を伝えるためにいろいろな方法が編み出されているだけで、それが分かれればすごく伝わることだったのかなと思います。

### 全く知らない人にも届く機会に

本誌 映画が完成した時の感慨はいかがでしたか。

平塚 難しいと思われていたものが伝わったと思うことと、伝えたいという心は伝わるんだと信じて、そこに向かつてやってきてそれが伝わったのが分かった時にすごく感動しました。手話通訳者の方の内面にももつと踏み込んだところもあつたのですが、最終的にああいう形で音声ガイドを仕上げられて良かったと思つてます。

本誌 公開に向けての期待、不安などはいかがですか。

平塚 試写会などこれまで何回か上映させていただく機会があつて、自分が思っている以上にすごく伝わってくれているというか、感動し

た、いろいろなことを学ばせてもらった、気づきがあつたという感想を聞いて、この映画が障がい者のことを知るひとつのきっかけにもなると思うし、無理だよと思つていることもやってみようと思ふ扉を開く、背中を押すような作品として届いたらいいなとも思つるので反響がとても楽しみです。特に障がい者サポートのこと、この映画館のことも知ってもらいたい機会になると思うんですけど、映画は全くそういうことを知らない人にも届くチャンスがあるし、この映画を使ってユニバーサル上映も広げていきたいとも思っています。

### ★ 《プロフィール》

平塚 千穂子（ひらつか・ちほこ） 1972年生まれ、東京都出身。01年にバリアフリー映画鑑賞推進団体「City Lights」を設立。以後、視覚障がい者の映画観賞環境づくりに従事。16年、日本初のユニバーサルシアター「CINEMA Chupki TABA TA」を設立。その功績が讃えられ、第24回ヘルンケラーサリバン賞を受賞。